「静かなる世界」心を一つに掴む未来
国境を超えて～願いは一つ～

堀山　有里子

〝リッスン　トゥー　ザ　サイレンス〟
(Listen to the Silence.)
「静けさに耳を傾けてみて」
何とも矛盾した言葉の組み合わせから成るこのフレーズを人生で二度聞いたことがある。
二度とも、私の無二の親友からである。
一度めは、その親友の故郷カナダの地で。親友が子供の頃から慣れ親しんだ湖を前に。訪れた季節が真冬であったので、湖は一面氷に閉ざされ、神秘的な程の静寂に包まれた世界であった。四半世紀も前の話である。
カヌーもボートも遊泳もできない冬の湖を前にして私達は、唯唯静かに佇んでいた。

何をする訳でもなく寒さと静けさの中に立ちつくす意味が全く理解できなかった若い頃の私は彼女の袖を引っぱり「もう行かない？」と促した記憶がうっすらとある。その時の彼女の私への返事が「静けさを聞こう」だった。

この彼女とは学生時代に知りあった。それ以来、（お互いの多忙さゆえに細く細くなった時もあったが）文字通り〝細く長く付き合い続けた〟仲間だ。そして彼女は周りの人を幸せな気持ちにする天才だった。良いことは勿論のこと、身の周りに起こる悪いことも、辛いことも、彼女の思考回路にかかると一気に感謝すべきととらえる内容に変身してしまう。

私は、感謝するのが苦手な人間であった。自己肯定感も高くはなかったので、いわゆる「幸せに鈍感で、不幸に敏感」であった。そんな私の前に彗星の如く現れたのが彼女である。彼女は出逢って直ぐの私にこう言った。

「私、絶対にあなたと親友になるわ。まちがいない。ね、あなたもそう思わない？」と。

朝「おはよう」と挨拶を交わすやいなや始まる怒涛のおしゃべり。昨日の夢の話に始まり、彼女の御両親のホームパーティーの様子、国際電話の料金（まだ当時はネットの

普及前であった)、気になる男の子の動向調査、履習しようか迷っている科目…等々、放っておけば、いつまでもどこまでもにこにこと話し続けている様な明るい性格。情に厚く涙もろい一面も。そして日本人より、大の日本好き。〝コイバナ（恋話）〟での彼女の決まり文句は「私の永遠の恋人は、柴又の寅次郎さん」だ。

そんな明るい彼女の一番の得意技は、（私の苦手とする）〝感謝すること探し〟であった。感謝する相手は人限定ではない。歩いている道端に咲く花との出逢い、今朝食べた美味しいシリアル、ふと吹いた涼風、日射しをさえぎってくれる木陰、それら全てが感謝する対象物となる。どうしてそんな風に物事をとらえられるのか、彼女にたずねてみたことがある。「当たり前のことなんて、この世には一つもないから。私は今、幸せだから。どんな状況でも感謝の先に幸せがあるし、幸せの先にあるのも感謝。これは永遠不滅のスパイラル」

この言葉は時を超えて二〇二〇年、本来ならばオリンピック・イヤーとして活気にわいている筈の年に痛感する。人々は世界中が平穏と信じて何ら疑うことすらなかった。

だが現実は、全世界が未知のウイルスの猛威に脅かされ、外出自粛や禁止の敢行を余

儀なくされている。世界で街はゴーストタウンのように静まり返り、その様子はまるでCGか何かのようである。現実味が限りなく無い現実に、人々は戸惑い、困惑し、絶望すら感じている人も、決して少なくはない。

十数年振りに、旧友に再会する目的も兼ね、オリンピックイヤーの日本を訪問予定であった彼女。けれど実状は、医療従事者である為、休みもままならず、奮闘している日々。

心配で心配で…仕事や大切な睡眠の邪魔になりませんようにと願いながら、おそるおそるメールをすると、暫くしてのちに、「大丈夫」と返事が来た。そして、大変なはずの自分の事よりも、大好きな日本の状況や、老いてきた私の両親の身を案じ、逆にこちらが彼女にたくさん元気づけられてしまった。

二十五年前のあの日、神秘的なまでに静まり返った湖を目の前にして、二人並んで瞳を閉じた日。そうして「耳を傾けた」のは「静けさ」だ。彼女はそこに、春の到来を待ちわびる自然界の息遣いを感じとると言った。

そして春が近づいてくると、かすかにではあるが春の足音もそこに加わるのだそうだ。彼女の笑顔と共に、その時の光景が私の心に焼きついて離れない。それは二十五年を経

た今も色褪せることなく鮮やかなままに…。

自然の恵みに感謝し、人々に感謝し、感謝される人生を歩みたいという考えの持ち主である彼女は、その責任感や支命感が強いことも長年の付き合いから十分すぎる程わかっていた。そして、彼女の信念は肯定されこそすれ、否定されるべきものでないことも十分承知しているにも関わらず、最前線で闘う医療関係者である以前に彼女は私にとっては無二の親友なのだ。頭ではわかっていても心がどうしてもついていかず、彼女からの返信が滞った日から数日後、私はどうにも収めようがない胸騒ぎに、居ても立っても居られなくなり、親友の実家に連絡をとった。

「職場で感染して、今入院中です」

いつもは底ぬけに明るい太陽のような彼女の母は涙をこらえ切れぬ様子で告げた。私が一番聞きたくなかった返事だった。万が一私が連絡してきたら、と親友の伝言があった。

〝リッスン　トゥー　ザ　サイレンス〟

(Listen to the Silence.)

「静けさに　耳を傾けてみて」

二十五年ぶりの、あの言葉だった。

怖い位に静まりかえった氷の世界で、二人瞳を閉じてかすかな春の足音を探したあの日。

春の来ない冬はない。

朝の来ない夜はない。

愛が勝たぬ世はない。

感謝なく幸せはない。

親友が私に伝えたかったことは、どれなのだろう。これらのうちの一つかもしれないし、これら全てなのかもしれない。そして考えた。

私が今、できることは何だろう…と。

こんなに沢山の涙が、私の体の中にあったのかと驚く程に泣いた後、答えが出た。

「祈ろう」

私をここに、こうして筆を執って発信しようと突き動かした原動力は、この祈りである。彼女の回復のみならず、彼女と同様に過酷な医療現場で果敢に闘い続けて下さっている世界中の人々の無事を心の底から祈る日々だ。

「三密（密閉空間・密集場所・密接場面）を避けること」「不要不急の外出を避ける」私達にできることをきちんと実行することを通して、私は今ほど「世界」を身近に感じたことはない。

国境も、人種も、宗教も、文化も、何から何まで違う地球上の私達が今、一丸となって心を一つに頑張っている。世界は今、一つだ。

医療関係者の方々への感謝の気持ちを常に持ち一日一日を大切に過ごす人類の先にあるべき未来が幸せに包まれないはずはない。

今は氷のように閉ざされたと感じる世界も、今は暗闇の中に放り出されたと感じる世界も、「あんな時代も乗り越えてきたね」と振り返る日が必ず来る。

リッスン　トゥー　ザ　サイレンス

(Listen to the Silence.)

人影の消えた静かな静かな街並みが、通りが、物語ることの、なんと多いことだろうか。

私は、そこに世界中の人の一日も早い収束を願う熱いメッセージを聞き取る。二十五年前のあの日、春の訪れを待ちわびる自然のささやきを聞いたように。子供達の楽しそ

うな笑い声や、大人の尽きないおしゃべりが復活する日は、そう遠くないはずだ。そう信じる。

「親愛なる　G・B

あなたは私の、「世界」の、誇りです。

感謝の先にある幸せ、幸せの先にある感謝

あなたの言う通りですね。

世界は今一つとなり、あなたと共に闘っています。私達は負けない。そうでしょう？

また再び肩を組んで笑い合える日が来ます。

必ず再び手をとりあって喜べる日が来ます。

だから…だから…

あなたも負けないで」

すぐそばにある「世界」で

私の親友が命を懸けて「世界」の為に

今、闘っている
私も…感謝の気持ちを常に持ち
ここで一緒に闘っていく